Permanent Slave

『バアル連邦宇宙軍第一基地』
看板には、そう書かれていた。
看板は、巨大な金属性の壁の一番端に架けられていた。
その看板を、じっと見つめる女が居た。
Erzurum（エルズルム）帝国首都の東郊外に、バアル連邦宇宙軍の、最重要基地は存在した。
広大な大地に築かれた、この基地には、二〇本余りの高層ビル、巨大なパラボラアンテナと、電波望遠鏡、そして、無数としか言い様のない程のハンガー（航空機格納庫）が立ち並んでいる。更に、四千mを超す六本の滑走路が、有った。
日夜、航宙可能な大型戦闘機が離発着を繰り返し、宇宙艦が飛来する。
基地の周りは、一面の畑で、人家を探すのは、難しい。
女は、看板を凝視し続けていた。
フッ
一瞬、辺りが暗くなったかと思うと、爆音が響いた。
女の頭上、四五mを、重戦闘爆撃機が通り抜けて行ったのだ。
衝撃波が風を呼び、女の髪が大きく流れる。
『捕虜、売ります。詳しくは正門まで』
基地の看板の右下に、その様な広告が貼ってあった。極太のマジックで無造作に書かれているその貼り紙は、画用紙にビニール袋がかぶせてあるだけの、非常に粗末なものだった。
女は、正門に向かって、歩き出した。桃色の髪が、綺麗に整って、靡いた。それは、美しかった。

＊　＊　＊

「二一番。出ろ。」
看守の太い声が、鉄格子の向こうから聞こえて来た。
「面会人だ。」
看守はそう言って、扉を開けた。
コンクリートに囲まれた牢獄の中には、惚けた女が一人居た。
目は焦点があっておらず、じっとしているだけだった。
「立たんか！」
看守が、二人がかりで女の腕を掴み、立たせる。
それから、引きずるようにして、女を連れ出して行った。
女は、看守達のなすがままにしていた。

＊　＊　＊

「おら‼こっからは、自分の足で歩け‼」
看守は、女を乱暴に放り出すと、後ろから背中を蹴飛ばした。
女は、前へ倒れたが、のそのそと起き上がり、フラフラと歩き出した。
「部屋は一三番だ。客が待ちかねているぞ‼」
女の後ろから、看守の怒鳴り声が響いた。女はゆっくりと頷い

て見せた。
女が歩く度に、ニチャニチャと音がなった。男の精液が乾ききっていないためだ。関節を動かす度に、その音がなるのだ。
女は、ホコリまみれで、汚かった。衣服と言えば、胸と腰に巻いている襤褸タオルだけである。下着などない。身体は、アザだらけで、傷跡も目立つ。何日間も、身体を洗っていないらしく、臭いも非道かった。
ガチャン!!
一三番と大きく書かれた鉄扉の鍵が外され、扉が開いた。
女は、のっそりと向きを変えると、中へ入って行った。

＊　＊　＊

「この女がそうなのか？」
「はい。ナンバー二一。*Rahab*（ラハブ）です。」
来客ルームから声が聞こえる。嗄れ声と、太い男の声だ。
この部屋は、二つに別れており、マジックミラーによって、仕切られていた。ミラーには、真ん中だけ普通のガラスになっている部分があった。囚人または捕虜は、このガラスから来客の方をのぞく事が出来るようになっていた。
その覗きガラスからは、指揮官クラスのエンブレムを付けた屈強な男しか見えなかった。この男が、太い声の持ち主だ。
もう一人、嗄れ声の持ち主はミラーの方に隠れて見えない。
「非道いな。エルズルムの男は紳士だと聞いていたが？」
嗄れ声の音程は、男にしては高く、女にしては低いと言う感じだった。
「神経、精神共にやられている。これでは使いものにならん。よくこんなものを商品として扱えるものだな。」
嗄れ声が、文句をたれる。
「コイツは本来、商品扱いはしないんですよ。我国が連邦の第一国となった時の大赦で罪を免れたんです。本来なら極刑です。」
男が、言い訳をする。
「我々の会話は、聞こえているのか、あの者には？　全く反応がない。」
嗄れ声が、少しずつ、ラハブに近づいて来た。
覗きガラスに、桃色の髪をした背の高い女が映った。その女は、中でじっとしている女、ラハブをマジマジと見つめた。
「このマジックミラーを取り払ってくれ。」
女はそう言うと、マジックミラーをコンコンと軽く叩いた。
「そんな事は、出来ません。構造上、無理です。」
男が、額に冷や汗を流して、答える。
「嘘をつけ。この部屋を使ってレイプしたんだろう？」
女は、男の方を振り返った。にらんでいるのだろうが、前髪が顔の四分の三を隠しているため、表情が掴めない。
男は少し躊躇ったが、壁の中に埋め込まれている、隠しボタンを押した。マジックミラーが音もなく左右に開いた。
女は、何も躊躇せず、囚人ラハブの方へ歩み寄ると、左手で頬を掴み、ツラを自分の方へ向けた。
「美人だな。身体のラインも悪くないし、髪も柔らかい。整えてやれば、フェアレディにもなれる。」
そう言って、女はラハブの髪を、そっと撫でた。
「彼女の記録は？　宇宙海賊のヘッドだったそうだが……？」

男に背を向けたまま、女は訊ねた。
「極秘です。」
男は、即座に答えた。
「ここは、軍事最高司令部だろう？　データならいくらでもあるはずだ。手数料なら払う。」
女は、男の方へ振り返って、札束をチラつかせた。
「しばらくお待ちを。」
男は、しばらく考えていたが、そう言うと部屋から出て行った。
女は、椅子を引き寄せ、ラハブの前に座った。
女は、タバコを出して、ラハブに勧めてみたが、ラハブは何の反応も示さなかった。
しようがないので、女は黙って、ラハブを見つめていた。

＊　＊　＊

二〇～三〇分経って、先程の男が、若い娘と一緒に入って来た。情報部の人間だと、その娘は言った。
「ファイルです。」
男は、そう言って、分厚いファイルを女の前へ出した。
『**Level−1 SECRET FILES**』。その黒いファイルの表紙には、『第一級極秘書類』と書かれていた。
女は、それを受け取ると、パラパラとめくった。
「料金は？」
女は、ファイルを読みながら言った。
「ギルド通貨で、四千デイル。エルズルム通貨で二千五百ロール。連邦ギルド通貨で、六千ガルです。」
男は、女の右隣に来て、そう告げた。
「高いな。」
女は、下唇を、軽くではあるが、噛んだ。
「極秘情報ですので。」
男は無表情に答えた。
女は、懐に手を入れると、紙幣六枚を出した。
「連邦ギルドで、六千ガルだ。」
女は、紙幣を二つ折りにして、男の前へ出した。
男はそれを、スッと取ると、一礼し、後ろへ下がった。
女は無言のまま、右手をファイルへ添え、再びパラパラとページを捲りだした。
「可也、凄い女だな。よく今まで生かしておいたものだ。」
女は、ぼそっと言った。
「半年前までは、我がエルズルム帝国最大の敵だったのです。コイツの勢力を抑えるために、何十万という軍隊が必要だったのですからね。」
男は、呆れたように言った。
「確かに、凄い女ですよ。」
そして、そう付け加えた。
「一応、エルズルム人か。」
ラハブの、ＤＮＡデータを見ていた女はそう言った。
「もとバアル連邦宇宙軍第一司令の長女ですよ。彼は、エルズルム人ですから。子供思いで、この女は私生児だったのですが、彼は責任を取って、育てています。」
「その父を、殺しているんだな。この女は。」
「ええ、色々ありましてね。詳しくは、そのファイルに凡て載っ

ています。そのファイルはもうあなたのものですからね。但し、絶対に公表しないで下さい。」
「解っている。それで？　いくらだ？」
女は、ファイルから目を離し、男の方を向いた。
「情報料はいただきました。」
男は、すました顔で答える。
「それではない。この女の値段を聞いているのだ。」
女は、少し苛立った。
「失礼。ナンバー二一、ラハブは、ギルド通貨で三百デイル。エルズルム通貨で千ロール。連邦ギルド通貨で八百です。」
男は、女に歩み寄り、そう言った。
「⁉　資料より、安いのか？」
女は、男の顔を見上げる。
「この女は、我が軍の男どもの玩具にしかなりません。」
男は、そう答えると、女から視線を外した。
「連邦ギルドで、二〇倍の値を払おう。」
女は、椅子から立ち上がって、懐へ手を入れた。
「そんな‼」
男は、目を大きく見開いた。
「気にするな。私腹をこやすなり、何なりしろ。」
そう言って女は、紙幣を一六枚取り出すと、男の前へ出した。
男は、しばらく戸惑っていたが、静かに受け取ると、頭を下げた。
「そこの娘にも分けてやれば？」
少し嫌みを込めたニュアンスで、女は情報部の娘を一瞥した。
娘は、顔を俯かせてしまった。
女は、薄く笑った。

＊　＊　＊

「服くらい、サービスしてくれてもいいだろう？」
女は、非道く呆れていた。ラハブは、面会室で会った時と同じ姿で連れて来られていたのだ。首輪をはめられ、手には手錠が付けられていた。首輪と鎖の触れ合う音が、痛々しい。
男は、先程の情報部の娘に合図すると、適当に着るものを持ってくるように、手配した。
「ここへサインを。それから、奴隷の使用目的を、簡単に説明して下さい。」
男は、そう言って、ボードとペンを差し出した。
女は、ペンを手に取って、サラサラと名前を書いた。
「使用目的は、ハーレムだ。」
女は、ボードを男の方へ差し出すと、そう言った。
男は、眉を寄せた。
「女が、女のハーレムをつくるのも、面白いだろう？彼女は、私のハーレムの第一号だ。」
女は、そう言って、笑ってみせた。
男は、肩をすくめながらも、女からボードを受け取った。
そして、サインを確認した。
「ヴァルアだ。ヴァルア＝アロン＝フロミア(*Valua Alon Fr−omia*)。ヘブライ読みだ。」
女はそう言うと、ラハブの鎖と首輪を外してやった。
「服です。軍服ですが、我慢して下さい。」
先程の情報部の娘が、真っ黒な軍服を持って来た。エンブレム

や、軍関係の表示は一切取り外されているので、黒が異様に目立った。
「服くらい、自分で着れるだろう？」
女は、無造作に軍服を掴むと、ラハブの前へ出した。ラハブは、それを受け取ると、ノロノロと身につけ出した。汚れた身体に服を付けるのは、なかなか難しい。
「この辺に、ホテルはないか？」
ラハブが服を着ているのを余所に、女は男に訊ねた。
「この基地の表通りを北へ一〇km。古いですが、可也大きなホテルがあります。それから、奴隷の鎖は外さないで下さい。」
男は、大きな窓から見える表通りを指さすと、そのまま指を北へなぞって　みせた。
「何、心配するな。ま、邪魔したな。」
女はそう言うと、ラハブの背中をトンと押した。
「さあ、行け。」
女はラハブを促すと、男に一礼して、基地から出て行った。
「世の中、不思議なヤツがいるもんだ。」
女の姿が見えなくなってから、男はポツリとそう呟いた。

＊　＊　＊

二人は、一〇km歩いて、ホテルへ着いた。
「ここで、待って居ろ。必要な物を買って来る。」
女は、部屋をとると、ラハブを置いて、街の方へ出かけて行った。
街は、ホテルから二，三km離れていた。

スイス風のこの街は、煉瓦造りの商店が並び、ショーウィンドウには、華やかに様々な商品が、飾られている。この街は、エルズルムでも比較的、古風な街である。街の人々は、保守的な人間が多い事だろう。
街は、平穏だった。
一月前まで、統合戦争が行われていたとは、思えないほど、平和だ。人々の顔には、笑顔があふれているし、街自体も明るい。戦争と言う、暗い雰囲気は、全く感じられなかった。
統合戦争で、ここ、エルズルム本国まで戦火が及ぶ事は、まずなかったようだ。
バアル連邦は、統合戦争後、エルズルム帝国の独裁体勢に入っていた。連邦政府は事実上、その機能を停止し、今では、エルズルム帝国第九六代皇帝が、バアル連邦の長となっていた。エルズルムは、連邦加盟国を、ことごとく制圧してしまったのである。
銀河系最初の、大銀河帝国国家だった。
女は、街の中を、適当に歩いた。
洋服店をまわり、ラハブに必要な衣服を、彼女の趣味で、選んだ。
他にも、保存用・携帯用食糧，護身用武器，生理用品などなど、必需品は沢山ある。
女は、両手いっぱいに、大きな紙袋を幾つも抱えて、ホテルへ戻って行った。よく、前が見えるものだ。

＊　＊　＊

部屋では、相も変わらず、ラハブが椅子の上で惚けていた。

女は、紙袋をベッドの上へ放ると、ラハブの前に立った。
ラハブの目の焦点は、全く合っていない。
女は、右手を高く振り上げた。相手は何の反応も示さない。
女は、何の躊躇いもなく、高く振り上げた右手をラハブの頬めがけて振り降ろした。
キレの良い高音が、部屋の中に高く響いた。
女は容赦せず、往復ビンタを何十回と食らわす。
バッキーン!!
最後の一発は、拳で殴っていた。
ラハブは、椅子から転げ落ち、数メートル吹っ飛ぶと、壁にぶつかって、止まった。
「クッ……。」
ラハブが、初めて口を開いた。
彼女は、壁に寄掛かりながらヨロヨロと立ち上がったが、足を崩して、倒れ込んでしまった。
女は、ラハブの方へ駆け寄ると、肩を支えて、上半身を起こしてやった。そして、ラハブの顔をのぞき込んだ。
わずかではあるが、ラハブの眼が、自分の方へ向いた事を、女は見逃さなかった。
「私に、このデカブツを風呂に入れろと言うのか?」
女は、ラハブの耳元で、囁いた。彼女の、その表情には、悪戯っ気があった。
ラハブは、女に肩を借りながらも、ゆっくりと立ち上がると、風呂場の方へ、フラフラと歩いて行った。
「何だ。言葉が通じるのか。」
女は、先程の行為に対して、少し反省した。

＊　＊　＊

「風呂が、好きなようだな。」
女は、湯船につかっているラハブの表情を見てそう言った。
「邪魔をさせてもらうぞ。」
そう言って、女も浴室に入って来た。
浴室は、明るい肌色のタイルで統一され、上半分は白い壁になっていた。浴槽は、強化プラスチックで、極めて白に近いクリーム色だ。五m×三mほどと、広い。
湯は、人工的ではあるが、硫黄の香りが仄かに鼻を刺激した。
女は、身体を洗おうと思い、シャワーのコックをひねってお湯を出すと、石鹸を探した。だが、見当たらない。
「おや?石鹸がないな。ボディ・シャンプーもない。」
女は、ブツブツ言いながら、辺りを見回した。
ラハブは、自分の手の届く範囲に、石鹸を見つけると、それを掴んで、女の頭を狙って、軽く放り投げた。
石鹸は見事、女の脳天に命中し、バウンドした。それを女が、上手く右手でキャッチした。
女は、左手で、頭をさすりながら、後ろを振り返ったが、ラハブは何の反応も示さなかった。何事もなかったようなふりをして、外方を向いて、湯船につかっている。
「どうも、有り難う。」
女は、ニコッと笑うと、身体を洗い始めた。
旅の疲れを癒すには、風呂が一番だった。石鹸の香りが、気持ち良い。

身体を洗い終わったあとの、女の身体は、見事だった。本来、真っ白なはずの彼女の肌は、温められて、ピンク掛かっていた。肉付きは良く、身体のバランスも、素晴らしく見える。背が高いせいかも知れないが……。

女は、カカトまである長い髪を上手く束ねると、タオルを上から巻いた。そして、湯船の中に、身体を沈めた。

一息、つく。

「私はてっきり、頭がイカれてしまったとばかり思っていたが、あれは演技だったのか。それとも、生きる事自体を、……投げていたのか？」

女は、独り言のように、話し出した。

「さあな、俺にもわからねぇよ。」

ラハブが、ボソッと答えた。

「だが、今は少なくとも正常だ。礼を言うぜ。最後のパンチが効いた。いいパンチだった。」

ラハブは、更にそう呟くと、大きく溜息をついた。

「が、あいつらに復讐してやろうと思ってたのによ……あんたのおかげで、全部パアだ。」

ラハブは、顔を上げ、天井を見上げた。

「ほう。と言う事は、あの様な状況の中でも、生きる希望と、生きる理由があったわけだ。」

女は、静かに、そう言った。

「なるほど。そう言うとらえ方があったか。」

天井から目を離し、ラハブは、女の方を向いた。

「男の臭いはとれたか？」

女は、言葉を続けた。

「何とかね。」

ラハブは、少し悲しげな表情になり、女を自分の視線から外した。基地での事を、思い出してしまったのだ。

「しかし、おまえは、私に拾われた事により、今までよりももっと辛い人生を歩む事になる。」

女は、ラハブの表情を読み取って、ラハブの心を悟って、そう言った。そして、ラハブにスッと歩み寄ると、ラハブの顔をマジマジと見つめた。

「今度は毎日、女の相手をするのか？」

ラハブは、この女が、先刻、「ハーレムをつくる」と言っていたのを思い出し、茶化してみせた。

「フフ。それもあるかも知れない。今、おまえの脳に、直接、イメージを与える。」

女はそう言うと、さらにラハブに詰めより、そっとラハブの唇に自分の唇を重ねた。

ラハブは、一瞬びっくりして、女を突き離そうとしたが、自分の脳の中に流れて来た、様々なイメージ（情報）に気を取られてしまった。

一分程して、女は唇を離した。

ラハブは、我に帰ったが、唖然としていた。別に、女性に口付けされた事に唖然としているわけではなかった。そんなものは、疾うの昔に、記憶の隅へ、意識の奥へ追いやってしまった。今、ラハブの頭の中では、女が彼女に送り込んだ膨大なデータが展開されていた。ほんの一分間だけだったが、その間に、女の記憶と知識と知恵の殆どがラハブの中へ流れていたのだった。

十数分後。ラハブがやっと、女の方へ意識を向けた。恐らく、

整理がついたのであろう。しかし、ラハブは、自分の目の前にいるこの女が、先程送られた膨大なデータが、信じられないでいた。
「自己紹介をしていなかったな。名は、ヴァルア＝アロン＝フロミアだ。今日から、私が、お前の主人だ。お前はこれから、永遠に私と共に生きてもらう。私がどのような存在であるかは、今、お前の中へ流した、私の記憶の通り……。」
女は、ラハブの心の中などおかまい無しに話し出した。
薄笑いが、浮かんでいる。
「何か、感想は……？」
女、ヴァルアは、笑いを浮かべたまま、言った。
「信じられん。」
ラハブは、目をまん丸にして、そう呟いた。
「随分と、ワンパターンな感想だな。ま、信じたくなければ、信じなくていい。そのうち、嫌でも認めなければならなくなるだろう。言い方を変えた方が、良さそうだな。私に騙されて、これからずっと、私と共に生きてみないか？」
ヴァルアは、グッとラハブに詰め寄った。
ラハブは、しばらくヴァルアの顔を見つめていたが、鼻で笑うと、白い歯を見せた。
「面白い。騙されてやろうじゃないか。ヴァルアさんよ。」
そして、ヴァルアに視線を確りと合わせると、そう言い切った。
「クックックックッ。後先考えないタイプだな。根性だけはあると見える。」
ヴァルアは、冷笑に似た笑いをした。
「だが、俺は、後悔した事は一度だってないぜ。」
ラハブは、胸を張ってみせた。
「それは面白い。益々気に入った。お互い、頑張ろうじゃないか。」
ヴァルアは、薄笑いを浮かべると、右手を上へ上げた。
ラハブも、右手を上げる。
パーン！
二人は、手を打ち合った。

＊　＊　＊

翌日、早朝。二人は、ホテルを出た。
空気は肌寒く、藍色の空には、まだ星を確認する事が出来た。
息が、白い。
遥か南には、あの連邦宇宙軍基地の明かりが見える。数本のサーチライトが、天に向かって伸びていた。
北には、永遠と道が続いている。
東西には、山脈が横たわっていた。
「とりあえず、どうする？」
ヴァルアの隣で、山々を眺めながら、ラハブは聞いた。
「北へ行く。」
ヴァルアは、北へ延々と続く道を指さして言った。
「根拠は？」
ラハブは、ヴァルアの方へ、視線を移した。
「そんなものは、ない。」
ヴァルアは、静かに言い放った。
「私達には、時間が永遠にある。この程度の事で、綿密に計画を立てる必要などない。」

更にヴァルアは、そう付け加えた。
「全くだ。」
ラハブ、薄く笑った。
「行こう。」
うっすらと太陽の光が見え出す、早朝……。
二人は一歩北へ踏み出した。

……*fade out!*